

# 教育長だより No. 21

2021年12月6日

## ゲストティーチャーの活用

～ 中学生の社会科（地方自治）の感想から ～

11月に教育部長が中学3年生の授業（社会科）にゲストティーチャーとして迎えられました。市役所の仕事や地方自治について、クラスごとに1時間ずつの授業で講話と質疑応答をしていきました。

そして、先日、先生から生徒さんたちの感想をいただき、私も見せてもらいました。多くの中学生が興味を示したのは「野洲の変遷」のスライドショーだったとのこと。野洲駅がまだ地上駅だったころの写真（白黒、50年くらい前）やその駅前の風景、駅北口の一面の田んぼが年と共に巨大な工場に生まれ変わり、やがて「北野」のまちができていく様子など、生徒たちは「食い入るように」見てくれたそうです。

タイトルの「ショッピングモールを」というのは、何人かの生徒さんの感想にありました。それに続いて、「電気・ガス・人・給料などの『人』や『お金』に関して、しっかり調査して考えてることがわかって納得がいった。」などと綴られていました。以下に、何人かの感想を紹介します。

「昔の野洲と野洲駅がどんな環境でどのように発展していったのかがわかりやすかったし、おもしろかった。自分たちの地域に興味を持つきっかけになったし、野洲市の今の課題についても、「自分ならどうするだろう。」とよく考え（させ）られた。お金（市の財政や交付金など）の話は、少し難しくってうまくついていけなかった。」

「野洲市が発展していった理由や人口が増えた理由、〇〇などの会社について、今まで知らなかったことを知ることができて、良い経験になりました。また、市役所の仕事について知ることができました。この機会を通して、住んでいる野洲市について知ることが大切だと思いました。」

「野洲市が自分の思ってる以上にいろんな特徴のある町だということを知ることができて、野洲市の歴史や政治面、福祉や産業などを詳しく知れて、見分を広げた。社会を作る一員として、地方自治にかかわろうという意欲を持てた。」

『餅は餅屋』という諺（ことわざ）があります。地方自治のことは役所の行政マンが一番よく知っています。しかし、それを小学生や中学生に「いかに自分ごととして」考えてもらうのかについては、学校の先生を置いて他にありません。**今回の授業は、先生と教育部長がていねいに練り合わせた結果としてうまくいきました。そして、授業での先生の事前・事後指導があってこそこのようにした生徒さんたちの感想だったと思います。**

なお、授業はこの後「持続可能なまちづくり」の話し合いから最後は「市長への提言」と続くとのこと。

ゲストティーチャーについて、私には苦（に）かい思い出があります。それはずっと前、私が近隣市の中学校の教頭をしていた時のことです。社会科の先生から東京から講師を呼んで「石油と日本経済」について学ぶというのです。日本石油財団だったか名前は忘れましたが、そんな関係の団体が講師の無料派遣をしていました。事前・事後指導がもちろんあったことだと思いましたが、その先生は次々と講師を呼ぶばかり。大阪や大津から3～4人は続いたでしょうか、何の指導もなかったのです。私は校長先生と相談してストップをかけました。大人の講演会じゃあるまいし、生徒一人ひとりの学習状況に合わせた授業ではありませんでした。

今、学校応援団をはじめ、地域の人との結びつきが大きくなっています。ゲストティーチャーによる授業も当時とは較べるべくもなく活発です。そこで一番大きいのは「子どもにとってどうなのか」ということです。ますますこの活用は増えていくことでしょう。バーチャルではなく、**本物との出会いはその空気感と共に大きなインパクトを与えてくれます。**今回のような「ステキな出会い」、現場の先生方の工夫に期待しています。